

指導資料

国語 第102号



鹿児島県総合教育センター

— 小、盲・聾・養護学校対象 —

平成17年5月発行

基礎・基本の定着を図る小学校国語科学習指導の充実

—平成16年度「基礎・基本」定着度調査の結果を踏まえた指導法の工夫—

鹿児島県教育委員会では平成15年度に引き続き、平成16年度「基礎・基本」定着度調査を実施した。この調査は、学習指導要領が示す基礎的・基本的な内容のうち、「読み・書き・算」等の基礎学力について県全体の実態を把握するとともに、各校の課題を明確にし、きめ細かな指導法の改善に資するなど、基礎・基本の定着を目的としたものである。

今年度の調査では、小学校第5学年において国語、社会、算数、理科及び意識調査を、中学校第1学年、第2学年において国語、社会、数学、理科、英語及び意識調査を、該当学年すべての児童生徒を対象に実施した。

そこで、本稿では小学校第5学年を中心に国語科の意識調査及び定着度調査結果を分析するとともに、基礎・基本の定着を目指す国語科学習指導の工夫について述べる。

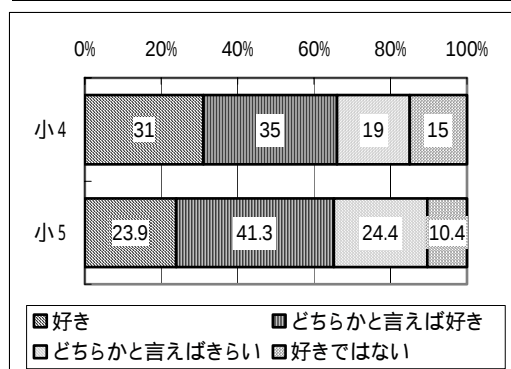
1 意識調査の結果と考察

(1) 国語科に対する意識

ア 国語科の学習に関する興味・関心

グラフ1の「小4」のデータは、昨年度、第5学年の1割が抽出調査で回答したものである。直接的な比較はできないものの、「好き」、「どちらかと言えば

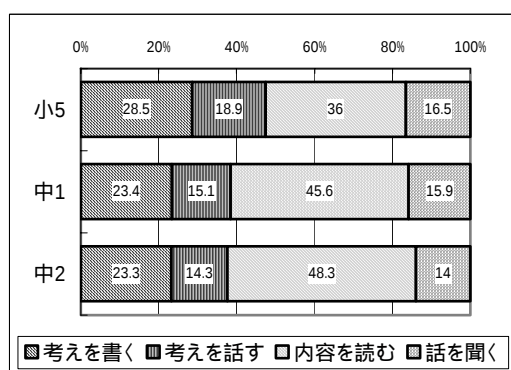
<グラフ1> あなたは、国語が好きですか。



好き」を合わせた割合は約65%とほぼ同じ割合で、維持されている。学年が進み内容が難しくなると、興味・関心も低下するのが一般的な傾向だが、今後も児童の発達段階に応じたきめ細かな指導や評価等を工夫し、国語への興味・関心を一層高めていく必要がある。

イ 領域別の興味・関心

<グラフ2> あなたは、国語のどんな勉強が好きですか。



第5学年の領域別の興味・関心をみると、「読む」が36%で最も高く、次いで「書く」、「話す」、「聞く」の順になっている。

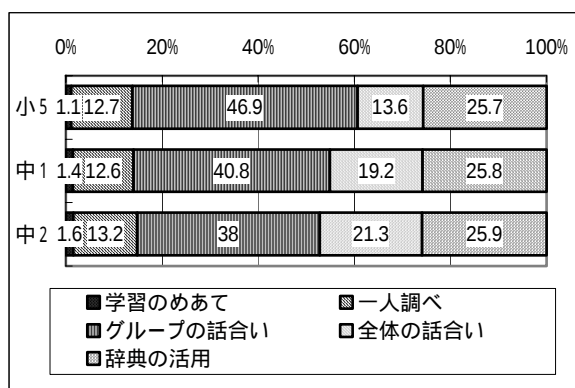
また、中学校第1学年、第2学年と進むにつれて、「読む」が約50%近くに増加している。

言語教育としての立場を重視した国語科指導を展開するためには、各領域に対する児童生徒の興味・関心がバランスよく高まることが大切である。

そのためには、「書く」、「話す・聞く」領域の指導法を創意工夫して、一層の充実を図ることが必要である。

ウ 学習活動に関する興味・関心

<グラフ3> あなたは、国語の授業で好きなことは何ですか。



各学年とも「グループの話合い」活動への関心が高く、特に小学校において顕著である。理由としては、少人数のために自分の意見を述べやすく、分からないことがあっても助け合って楽しく学習できることなどが考えられる。

効果的なグループ学習を行うためには、事前の一人調べや教科リーダーを中心としたグループにおける話合いの仕方を学ぶことが不可欠である。

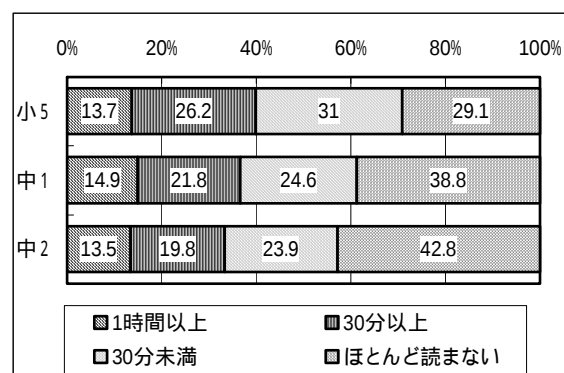
その実現のために、学習のめあてに対

する自分の考えを予めもたせたり、相手の思いや考えを正しく聞き取り、自分の考えとの違いやよさを見つけたりする力を高めておくことが大切である。

また、各学年とも「辞書の活用」への興味・関心が約25%と高くなっている。語彙力を高め、言葉に対する正しい知識を獲得させるために、国語科の授業をはじめとして辞書を大いに活用させたい。

(2) 平日の読書時間

<グラフ4> あなたは、学校の授業以外で、月曜日から金曜日まで平均すると1日にどのくらい読書しますか。(教科書、参考書、漫画、雑誌を除く)



30分以上の読書群と「ほとんど読まない」の未読書群に分けた場合、学年が進むにつれて未読書群の割合が増加し、逆転していることが分かる。読書は能動的な読解活動である。児童は読書への興味・関心に支えられながら、自分の読解力を駆使して多くの知識を得、豊かな人間性を育み、徐々に読書習慣の基礎を形成していくことができる。

最近では、朝の読書が盛んに行われるようになり、司書教諭の役割も重視されてきている。改訂の基本方針の一つに「読書に親しむ態度」があることを再度認識し、学校の読書指導や図書館利用計画等のさらなる充実を図りたい。

2 定着度調査の結果

小学校第5学年国語科の出題内容と平均通過率の結果は、表1のとおりである。

<表1> 観点別・設問別の調査結果と出題内容

観点	大問	出題内容〔〕は指導内容
話す・聞く能力 (93.3)	① (93.3)	話し手の意図を考えながら話の内容を聞くことに関する問題〔A(1)イ〕
読む能力 (77.7)	② (58.7)	登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むことに関する問題〔C(1)ウ〕
	③ (87.2)	目的や意図などに応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえることに関する問題〔C(1)イ〕
書く能力 (78.3)	④ (81.9)	目的や意図に応じて、書く必要のある事柄を整理して表現することに関する問題〔B(1)ア、イ〕
	⑤ (76.0)	考えを明確にするための文章の組立や効果的な表現に関する問題〔B(1)ウ〕
言語についての知識・理解・技能 (89.7)	⑥ (94.2)	副詞、接続語〔言(1)ウ(ア)〕 現代仮名遣い〔言(1)イ(ア)〕
	⑦ (85.7)	漢字の読み書き〔言(1)ア(ア)〕
平均通過率(86.5)		

全体の平均通過率は86.5%で、概ね良好と言える。観点別では、今回導入された「話す・聞く能力」が93.3%、「言語についての知識・理解・技能」が89.7%と高い通過率を示した。また、直接的な比較はできないが、昨年度の第6学年(4月実施)の調査結果と比べて「読む能力」(説明的な文章)や「書く能力」の通過率が10%以上上昇している。その一方で、「読む能力」(文学的な文章)の通過率は60%未満に留まり、昨年度の数値と比べても10%程度下回るという結果であった。

全体的には、概ね定着が図られつつある中で、文学的な文章の読解等については依然として課題が残る形となっている。以下、設問別に考察を進める。

(1) ①聞き取り

台本は500字程度の意見文で、話し手

が希望調査の結果や経験などを基に、やりがいのある飼育委員会の活動について意見発表する形で構成されている。各設問の内容と通過率は以下のとおりである。

中問	出題内容	解答形式	平均通過率%
一	放送の中で「わたし」が一番伝えなかったことを選択肢から選ぶ。	選択式	93.4
二	「わたし」の発表の中で述べられていたものと述べられていなかったものを解答する。 1 飼育委員会の希望者数 2 飼育委員を始めた学年 3 飼育委員の苦勞 4 飼育委員の楽しみ	○×式	93.1 86.6 95.5 97.7

中問一及び二では、朗読テープを聴いて、話し手が飼育委員会について伝えたい思いや考えをつかんだり、話の内容を正確に聞き取ったりする力が求められる。

平均通過率はいずれも90%前後と高いことから、話の中心や相手の意図を聞き取る学習指導が成果を上げていると思われる。

(2) ②文学的な文章

中問	出題内容	解答形式	平均通過率%
一	白鷺の様子を表現した文章について説明がふさわしくないものを四つの中から一つ選ぶ。	選択式	39.7
二	少女が「不思議にはらは立たなかった」のはどんな気持ちだったからか、当てはまるものを四つの中から一つ選ぶ。	選択式	77.6

この問題に使用した杉みき子氏の「白さぎ」は、人物の心情や情景の描写など、優れた叙述を味わえる作品である。

中問一は、以下の文章を読んで、四つの選択肢から不適当なものを一つ選ぶ問題である。

このあたりの田んぼに來慣れている鳥なのか、人をおそれる様子もなく、しきりにどろの中をつついていいる。辺り一面かれ色の風景の中で、その白いすがたは、どこかちがった世界から切りぬいてきたようせいのかげのようにあざやかだった。

各選択肢は問題文と次のように関連する。

< 選択肢 1 > かれ色の風景と白鷺の白色とを比べて、白鷺を目立たせている。	
文	辺り一面のかれ色の風景の中で、その白いすがたは、～
< 選択肢 2 > 白鷺の行動から、白鷺の様子が分かるようになっていく。	
文	人を恐れる様子も無く、しきりに泥をつついていく。
< 選択肢 3 > 気持ちを表す表現が工夫されていて、少年の白鷺に対する気持ちが伝わってくる。	
文	(× 気持ちを表す表現はない。)
< 選択肢 4 > たとえを効果的に用いて白鷺を美しく表現している。	
文	～その白い姿は、どこかちがった世界から切り抜いてきたようせいのかげのようにあざやかだった。

選択肢 1, 2, 4 については、白鷺と風景との色の対比や、餌をついばむ行動、美しい姿の比喩的な表現などが取り上げられており、文の内容と一致している。一方、選択肢 3 に該当する心情の表現は無いため、これを不適当として指摘することになる。

この問題の平均通過率は 39.7% であったことから、児童にとっては登場人物の行動や情景についての表現を読み取ることは、難易度の高い学習であると思われる。叙述に即して内容を正確に読み取る力をつけるための指導法の改善が今後の課題である。

また、選択肢の中から不適当なものを回答させるという設問も、結果的に難易度を高めていると思われる。問題を正しく理解して解答しようとする態度の育成も併せて指導していく必要がある。

(3) ③ 説明的な文章

中問	出題内容	解答形式	平均通過率%
一	「そのような所」とはどのような所か、文中から 2 ヶ所書き抜く。	記述式	
	1 暑くて乾いた砂漠地帯		90.3
	2 冬には～されてしまう所		83.4
二	「体がずんぐりしていてまるっこい」のは寒い地方で生きていくのにどうして都合がよいのか、選択肢の中から選ぶ。	選択式	89.7

三	この文章で筆者が述べていることは何か、選択肢から選ぶ。(要旨把握)	選択式	85.5
---	-----------------------------------	-----	------

問題文は、増井光子氏の「動物の体」からの出題である。

中間一は、「そのような所」という指示語の内容を記述するもので、2 問とも 80～90% の高い通過率である。記述式の問題は句読点も含め、文章を正確に記述する力が求められる点で、選択式に比べて難易度が高い。通過率の高さは、普段から指示語の指す内容について丁寧に読み取る学習が積み上げられた成果であると考えられる。

中間二は、「体がずんぐりしてまるっこい」という体形の特徴と気候との関連について、正答を一つ選ぶ問題である。「体の表面積が小さい→外気と接する面積が小さくなる→外気に奪われる熱が少なくなる」という論の組立てを読み取る必要がある。通過率は 89.7% と高く、筋道立てて理解することができていると考えられる。

中間三は、文章の小見出しを選択する問題で、段落相互の関係や要旨を的確に把握する力が必要である。通過率は、85.5% と高く、要旨を把握する力も概ね良好であると思われる。

このように、中間二及び三は、説明的な文章を読み取るための基本となる「書かれている内容を的確に読み取る」力が問われる問題であるが、いずれも 80～90% の高い通過率を示している。これは、中学年における「内容の中心をおさえる」学習が的確に行われた成果であると考えられる。

今後も、様々な教材を通して論理的な思考力や要旨を把握する力を高めていくことが求められる。

(4) Ⅳ 構成力・効果的な表現

中問	出題内容	解答形式	平均通過率%
一	手紙の[ア]の部分に入る最もふさわしいものを選択肢の中から選ぶ。	選択式	96.4
二	手紙の[イ]の部分に入る「依頼の文章」を、送ってほしい物が相手に伝わるように書く。	記述式	67.3

問題文は、谷川小学校 5 年 1 組が総合的な学習の時間で点字図書館へ見学に行くことになり、事前学習のために資料の送付を依頼する手紙を書くという設定である。

中問一は、「はじめまして。」に続いて、自己紹介と資料請求の目的を相手に伝えるということを理解しているかを問うたものである。通過率は 96.4% で、概ね理解できていると思われる。

中問二は、資料送付の依頼をする手紙を記述させる問題で、内容の観点として以下の 3 点が挙げられる。句読点や文字の間違ひ、字数などは評価に含まれていない。

送ってほしい物（点字図書館について分かる資料）が書かれている。
お願いの言葉が書かれている。
敬体で書かれている。

通過率は、67.3% と低い割合にとどまっている。以下に、誤答例の一部を紹介する。

○ 送ってほしい物が書かれていない。
資料を送ってください。/ そちらの資料を送ってください。/ 資料がほしいんですが。
○ お願い(依頼)の言葉がない。
点字図書館について分かる資料は何かないですか。
○ 敬語が使われていない。
点字図書館について分かる資料を送ってほしい。
○ そのほかの誤答例
点字の本を送ってください。

これらの結果から、伝えようとする目的意識や相手意識はあるものの、依頼の手紙

を書こうとしている場面への意識や、どのように書けばよいのかという方法意識、しっかり伝わる内容になっているのかという評価意識が不十分な点に、つまりきの原因があるのではないと思われる。

(5) Ⅴ 比喩等に関する問題

出題内容	解答形式	平均通過率%
1～3の工夫がなされている文を選択肢の中から選ぶ。 1 ものの様子を例える(比喩) 2 言葉の順を逆に置く(倒置) 3 文末を体言で止める(体言止め)	選択式	82.1 78.3 67.6

表現の工夫に関する問題であるが、通過率は 3 の体言止めを除き 80% 程度である。

1 の「比喩」や 2 の「倒置」に比べて、3 の「体言止め」は児童に十分定着していないことがうかがわれる。「夜空にかがやいているたくさんの星。」のように、体言止めは身近な生活の中でしばしば触れることができる表現である。授業や日記指導、読書指導等の機会を通して、意図的に取り上げ理解を深めさせるとともに、身近な表現の工夫として親しませることが必要である。

(6) Ⅵ 文法・語句の意味や用法

中問	出題内容	解答形式	平均通過率%
一	()に合う副詞を選択肢の中から選び、文を完成させる。 1 きゅうに(ふり出しました) 2 なかなか(来ません) 3 そろそろ(時間です)	選択式	97.6 98.4 98.1
二	()に合う接続語を選択肢の中から選び、文章を完成させる。 1 次に 2 しかし 3 だから	選択式	97.0 94.7 93.9
三	仮名遣いの正しいものに○、間違っているものに×を書く。 1 ぢめん(地面) 2 つづく(続く) 3 ゆ う(言う)	○ × 式	76.6 98.0 93.0

中問一の副詞の選択は、国立教育政策研究所(以下、国研と記す)「平成 13 年度教育課程実施状況調査」と同一問題であるが、通過率は全国とほぼ同値で、良好である。

中間二の接続語の選択に関する問題も、90%以上の高い通過率となっている。

中間三は、現代仮名遣いの表記に関する問題で、2と3は90%を超える高い通過率であるが、1「ぢめん」は76.6%と低い通過率にとどまっている。

「地」という漢字は、第2学年で扱われており、「土地(とち)」や「地面(じめん)」などの形で提示されている。「鼻+血→鼻血(はなぢ)」「近い+付く→近付く(ちかづく)」は、「ち・つ」で始まる言葉が他の言葉の下についたため濁って発音されるが、「地+面→地面(じめん)」は「ちめん」が変化して濁音になったものではないため、「ぢめん」と表記するのは不相当である。加えて、「縮む(ちぢむ)」「続く(つづく)」「鼓(つづみ)」のように二つ続いて、後の言葉が濁音になる場合があることなども理解させておくことが必要である。

(7) □ 漢字の読み書き

中問	出題内容	平均通過率%	初出学年
一	漢字の読みを書く。		
	1 支える(ささ)	96.8	支(5)
	2 早退(そうたい)	91.3	早(1) 退(5)
	3 観測(かんそく)	86.6	観(4) 測(5)
	4 防止(ぼうし)	91.1	防(5) 止(2)
二	5 通過(つうか)	93.1	通(2) 過(5)
	漢字を書く。		
	1 はこぶ(運)	90.1	運(3)
	2 きょうりよく(協力)	92.8	協(4) 力(1)
	3 じゅうしょ(住所)	74.1	住(3) 所(3)
	4 さんか(参加)	71.7	参(4) 加(4)
	5 じけん(事件)	69.6	事(3) 件(5)

全体的には、漢字の読みが書き取りに比べて通過率が高い傾向にある。

中間一2「早退」は、昨年度小学第6学年の問題と同一問題であるが、通過率は前回よりやや向上している。

中間二の漢字の書き取りは、「件」(第

5学年5月初出)を除き、第4学年までの既習漢字である。「1 運ぶ」「2 協力」「3 住所」は、国研の同一問題と比較すると、通過率が7~8%程度高く、概ね良好であるといえる。

しかし、「3 住所」、「4 参加」、「5 事件」の通過率そのものは70%程度にとどまっており、定着が不十分であることがうかがわれる。誤答例は以下のとおりである。

住所	・部首違い(住所) ・点画の欠落(住所) ・あて字(住所, 住居, 場所, 住書など)
参加	・点画の間違い(3, 4画目の欠落, 画の方向の違い) ・あて字(賛過, 参火, 參觀など)
事件	・部首の間違い(「イ」を行人偏に) ・点画の間違い(5画目の欠落) ・あて字(事検, 事険, 事見など)

つまずきの主な傾向としては、点画の欠落や、部首の間違い、当て字などが挙げられる。また、「参」では6~8画の左払いが右払いになっているものも見られた。これらは、初出の段階か、または時間の経過に伴って、間違った形で定着したものと考えられる。

また熟語については、「住む+所→住所」、「事, 件ともに(ことがら)の意→事件」のように成り立ちや意味を理解することが大切であるが、そのことを考慮せずに、安易に同音の漢字を当てたものも見られる。児童に、漢字や熟語を正しく理解させるための指導の在り方が課題である。

3 基礎・基本の定着を図る指導法改善

(1) 主体的に聞く態度の育成

より主体的な聞き手を育成するために

は、「相手の意図をつかみながら聞く」能力を育成することが大切である。話し手の思いや願いを考え、工夫された組立てや言葉遣いの中から、話し手の意図をつかみながら聞くことにより、的確な伝達や思いの共有が可能となる。指導に当たっては、次のような手だてが考えられる。

一方的な聞き取りに終わらないために、話題（課題）に対する自分なりの考えをもって聞かせる。

話し手の意図や考えをより深く理解するために、質問したいことを考えながら聞かせる。

聞き取りメモを活用させる。

- ・ 要点の箇条書き（５Ｗ１Ｈ）
 - ・ 中心的な語句、主張
 - ・ 質問したい事柄
 - ・ 感想、自分の考えとの比較など
- 聞き取りメモを基に再構成し、発表や報告をさせる。

話す・聞く活動は、日常生活の中で豊かに展開されることで実践的な言葉の力となる。国語科で身に付けた言語能力を、特別活動や総合的な学習の時間などでも十分に発揮できるように、「話す・聞く」活動の年間指導計画を作成し、指導を進めていくことも大切である。

(2) 叙述に即した読みの習熟

㊦の設問において、叙述に即した読みの指導の在り方を課題として挙げた。

叙述に即すということは、書かれた内容をそのまま読むということではなく、言葉への気付きを大切に、文脈における言葉の意味、語感などの幅のある理解や読み取りを通して、表現の役割や価値をとらえようとするものである。

この「叙述に即した読み」の習熟を図らなければ、場面の移り変わりや情景の想像も、表現や叙述と関係付けた人物の心情の読み取りも、漠然とした読み味に終始しかねない。場面ごとの想像を広げ、叙述と結び付けて読みを深める指導を通して、確かな言葉の力を身に付けさせることが大切である。

指導法の改善としては、次のような手立てが考えられる。一人一人の児童の実態に応じた柔軟な工夫が必要である。

- 作品を読んで、全体や場面のあらすじをとらえた後、感想の根拠を叙述に基づいて確かめさせる。
- 短い文章や作品の一場面を基に、心情や情景、行動についての表現などを他の表現と比較しながら正確に読み取るスキルを行う。
- ・ 心情を表す言葉の解釈
(わくわく、にっこり など)
- ・ 情景を表す言葉の解釈
(青く澄んだ空、真っ赤に燃える空)
- ・ 行動を表す言葉の解釈
(目をつぶる、ぎゅっとにぎりしめる)
- 考えさせたい言葉に着目させ、辞書的な意味・用法と、前後の文脈から読み取れる言葉の表現的な意味・用法を比較して鑑賞させる。

また、読書への興味を高めることを念頭におきながら、多様な叙述の方法に触れさせ、関心を高めることも大切である。

(3) 場面・方法・評価意識を高める工夫

㊦の問題では、場面意識、方法意識及び評価意識をもたせる指導の在り方を課題として挙げた。

㊦の誤答例に見られるように、児童は「点字を通して福祉を学ぶ」という目的

は理解しているものの、具体的にどのような学習場面を迎え、そこでどのような表現活動を行うことになるかということまでは、把握していないのが実状である。そこで、以下のような手だてをとることが必要となる。

〔場面意識を高めるために〕

- 授業の導入で学習計画を提示し、前時の想起と合わせて、本時の位置付けやねらい、どのような学習を行う場面かを具体的に理解させる。
- 学習場面を絵に表し、学習活動のポイントを吹き出しなどに入れた掲示資料を見せることで、視覚的に場面を理解させる。

〔方法意識を高めるために〕

- 書き手の意図や伝えたい内容を付箋紙を使って整理し、構想メモを作らせる。
- 手紙の形式をもとに、相手にとって読みやすく、分かりやすい順序、表現方法、言葉遣いなどを考えさせる。

〔評価意識を高めるために〕

- 構想メモを評価の観点として活用し、意図や内容が的確に伝わる手紙になっているか確かめさせる。
- 書き手と読み手に分かれて、意図や内容が的確に伝わる手紙になっているか確かめさせる。その際に、読み手が手紙について感じたよさを必ず入れるようにさせる。

こうした指導の観点は、他の書く活動へも敷衍して活用することが可能である。

(4) 漢字の意味理解と習熟

□では、漢字や熟語を正しく理解させる指導の在り方を課題として挙げた。

例えば、五年上「漢字の成り立ち」の中では、「住」について、「人偏が人、主が燭台の火を表すことから、一か所にじっと

している意味」と説明されている。今回の調査では、人偏を行人偏と間違える児童が多かったことを踏まえると、単に点画が欠落した点を指導するだけでは不十分である。やはり、「住」についても、「行人偏は歩き回る、主は伸びる草を表すことから、前に進んでいく意味。使い方：往復、往信、往診など」という説明を行い、成り立ちの違いから点画が異なることをしっかりと認識させる必要がある。

漢字の指導については、当該学年に配当されている漢字は、原則としてその学年で指導するが、読みよりも書き取りの方が習得に時間がかかるという実態を考慮し、次の学年までに定着を図るように配慮することとされている。今回の調査でも、第3学年、第4学年の漢字の書き取りが約70%程度の通過率となっていることから、現在の学年の内容だけでなく、前学年の漢字についても計画的に習熟を深めることが肝要である。また、後の学年の配当漢字を含む熟語についても振り仮名を付け、必要に応じて提示することで、熟語への意味理解を一層高めることが可能である。

漢字の習得は、授業のほか、読書や手紙、日記など、実際の生活場面も含めて、漢字に触れる頻度が高いほど習得率や運用能力が高まると思われる。多様な機会を積極的に活用しながら、楽しく漢字に親しめるよう工夫したい。

今回の調査結果を基に、児童一人一人の状況に応じたきめ細かな指導法の工夫改善が図られることを期待したい。（企画課）